

中部の

エネルギーを 築いた

人々

日本の電力王・ 福沢桃介の生涯と業績

福沢桃介は1868(明治元)年6月25日、現在の埼玉県川越市に近い比企郡吉見町で生まれ、今年生誕150年の節目になる。

まず、「日本の電力王・福沢桃介の生涯と業績」を統一テーマにして連載するに当り、その生涯を簡単に紹介し、福沢桃介が生きた時代の背景とその業績を青山正次大同大学名誉教授と執筆する。



福沢桃介

1868(明治元)～1938(昭和13)年
資料提供：でんきの科学館、留学直前の
福沢桃介(20才)

福沢桃介の生涯

福沢桃介の歩みを、次の通り大きく9期の節目に分けて紹介してゆく。

- 1 川越の麒麟児と呼ばれた青少年時代
- 2 慶応義塾での福沢諭吉先生と岩崎桃介
- 3 米国留学
- 4 実業界での活躍時代
- 5 丸三商会の失敗
- 6 電気事業に参入一名古屋電灯から電力王への道を歩む
- 7 政界入りー政友会で1期
- 8 電力王の座ー日本で初のダム式大井発電所
- 9 福沢桃介と川上貞奴

1 川越の麒麟児と呼ばれた青少年時代

福沢桃介は、1868(明治元)年に父・岩崎紀一と母・サダの次男として埼玉県比企郡吉見町荒子で生まれた。1874(明治7)年に川越市に転居し川越小学校に入学、小学校に通う傍ら漢学塾に通い、卒業後は父の実家の原市町に預けられ漢学塾で学んだ。1880(明治13)年に川越中学に進み神童の誉れ高く聡明であったので川越の麒麟児と呼ばれた。1883(明治16)年に卒業すると、慶應義塾の

真野観我
教師の世
話で慶應
義塾に入学した。

2 慶応義塾での福沢諭吉先生と岩崎桃介

慶応義塾に入学し、人並外れた秀才とその反面わんぱく振りを発揮して生活していた桃介に、福沢諭吉家の婿養子になってほしいと奇想天外な縁談が持ち上がった。この話は1886(明治19)年の春に運動会が開催された時に、桃介は真っ白なシャツの背中にライオンの首を大きく描いてもらったのを着て駆けだした。長身美貌に加えて踊るようなライオンのたてがみの雄姿は全観衆を圧倒し注目の的となった。この時来賓席の中で興味を持ったのは諭吉先生の次女・房であった。丁度婿探しの時期にあったので諭吉先生の妻・錦も、この縁談に同意した。そして1886(明治19)年12月17日付けで房との結婚を前提に桃介が福沢家に養子入りして福沢桃介となった。

この養子入りとなった前の12月9日付けで岩崎家に対し下記の挨拶があった。この時の養子縁組の大意は下記の通りで、当時、養

子縁組に関する考え方と房に対する無類の子煩悩振りを伺うことができる。

- ① 岩崎桃介を福沢諭吉の養子として貰い受けのこと。
- ② 養子は諭吉相続の養子にあらず、諭吉の次女お房へ配偶して別家すること。
- ③ 別家の上は福沢諭吉夫婦より、居家處世の義に付心附の件は忠告も致す可致候得共、凡俗普通所謂舅姑の關係をもつて万に桃介お房の家事に干渉することなかるべし。
- ④ 養子の相談整え候上は、桃介は直ちに米國もしくは英國へ留学致すべき事。
- ⑤ 外国留学の期限は3ケ年を約すること。
- ⑥ 留学帰朝の後は婚姻致す可成れども、桃介が職業につくまでは福沢家より見苦しからざるよう、生活の資金を給すべきこと。
- ⑦ 桃介夫妻の間は男尊女卑の旧弊を払い、貴婦人紳士の資格を維持し、相互に礼を盡して以て一家の美を致すのみならず、広く世間の模範たるよう可致事。

3 米国留学

1887(明治20)年、横浜からリオデジャネイロ号でサンフランシスコに上陸、ニューヨーク州ポーキプシのドクトル・ヨンハウスのところに下宿した。そこから実業学校イーストマン・ビジネス・カレッジを4ヶ月で卒業後、ペンシルバニア鉄道(本社：ペンシルバニア州フラデルフィア)に見習いとして勤めた。見習いとはいえ、1名の社員を付けきりにして賓客扱いの待遇で、この頃ボストン、ニューヨークなどに行き、また三菱財閥3代目統帥・岩崎久弥などとワシントンでハリソン新大統領の就任宣誓式を見物した。また、新日の富豪で政界にも知られたモリス邸にも日本学生と一緒にたびたび訪問した。この頃の出来事を故郷の両親に「小生は実に幸福の地位に居り候」と手紙を送った。

4 実業界での活躍時代

1889(明治22)年、アメリカ留学から帰国、福沢房と結婚、北海道炭鉱鉄道株式会社に入社し、翌年北海道札幌に転居赴任した。東京支社が開設されたのに伴い売炭係支配人として東京に転任した。この頃、石炭取引の交渉

をするようになったのが浅野総一郎や愛知石炭商会の下出民義などで、石炭の直接販売を開始してから順調に売上げを伸ばしていった。また1894(明治27)年の日清戦争の勃発では内地の汽船が御用船に徴用され、一時途絶の状態にあった時、ノルウエーの汽船を3隻チャーターして石炭の輸送に充て供給した。

猛烈な社員とし働く中、英国船を受け取る膽振丸の甲板で咯血、肺結核と診断され養生園へ入院、3ヶ月後に大磯で転地療養生活に入った。

大磯に転地療養中に自身の貯金3,000円から1,000円を元に株式相場を始め1年間で10万円にした。この頃、兜町の飛将軍、韋駄天の相場師と呼ばれる程であった。その間に病気は回復し全国各地の旅に出た。

5 丸三商会の失敗

1899(明治32)年、本店を東京日本橋三十三間堀に置く貿易商「丸三商会」を設立した。小樽と神戸に支店を、後に中国大連にも配した。桃介は松永安左衛門を日本銀行から引き抜いて神戸支店長に登用した。そして横浜の米国貿易商会と英語で取引を始め、次第に商いが大きくなり、一挙20万円の枕木輸出の商談が進んだ。この仕事は日露戦争後、ロシアの東清鉄道敷設のために北海道の枕木を輸出しようとするもので、この商取引を仲介する米国貿易商会が東京興信所に信用紹介をしたところ「信用絶無、資産僅少」という報告をした。これが致命的となり三井銀行からの融資も断られ、翌年に倒産の憂き目にあった。福沢諭吉先生からも手厳しく叱責され、後に人生のなかで一大出来事であったと述懐した。この間に福沢諭吉先生は1901(明治34)年2月3日に死去した。

桃介はこれらの心労がたたって再び咯血し京都の同志社病院に入院、この時、神戸に在住の松永を呼んで丸三商会の残務整理を依頼した。松永は丸三商会閉店後、桃介からの500円の小切手をもとに福沢の福と松永の松を取って石炭を取引する「ゼネラルブローカー福松商会」を設立した。当時、武藤山路鐘紡社長、山下亀三郎山下汽船社長、下出民義愛知石炭商会社長らと知合い順調に事業を

進めたが商売拡大のために手を出した筑豊炭鉱が不良山であり、また株の暴落で大損をだし倒産した。

孤影飄然としていた桃介は井上角五郎に勧められ北海道炭鉄鉱道(株)に再入社した。そして1905(明治38)年、英国からわが国初の外資導入となる百万ポンド、約1千万円の導入に成功したが翌明治39年に北炭を辞職した。

この頃、再び本格的に株式投資に乗出し、日露戦争後の株ブームに合わせ紡績、鉄道、鉱山などの株取引を始め、資産を300万円(現在の35億円に相当)まで増やした。株式仲間では成金の一人に数えられたが、次第に電力、ガスなどの特定銘柄に絞り投資した。1907(明治40)年の株式暴落に際しては、それ以前に処分し、以後、株式投資をやめ実業界に入った。

6 電気事業に参入一名古屋電灯から電力王への道を歩む

1906(明治39)年に九州佐賀県で水力発電を計画する広滝水力電気(株)の大株主となり取締役就任、また、1910(明治43)年に福岡市が九州・沖縄八県連合共進会を開催するため市内に路面電車を建設する計画を立てたので、すぐ福博電気軌道(株)を設立、自ら社長に就任し、実務は松永安左衛門に当たさせた。中部地方では1908(明治41)年に豊橋電気(株)に出資して取締役社長に就任したのを皮切りに、1909(明治42)年に名古屋で下出民義、矢田績(当時三井銀行名古屋支店長)と会って株の買収を進め名古屋電灯の筆頭株主となり取締役を経て常務取締役に就任した。そして当時、反名古屋電灯を旗印に地元の有力

実業家の肝いりで設立され、八百津発電所の建設を計画していた名古屋電力(株)との吸収合併をわずか2週間でまとめ上げた。この合併で力を見せたことが、逆に地元の反対派の警戒心をあおり、桃介は嫌気がさし常務を辞任した。桃介を追い出した名古屋電灯は社長に加藤重三郎名古屋市長を選出、加藤は市長をやめて経営に専念したが業績は改善されず、再び経営刷新を求める声が高くなり、再び1913(大正2)年1月に常務に復帰、経営改革に着手し翌年社長に就任した。

7 政界入り一政友会で1期

1912(明治45)年、第11回衆議院議員選挙に千葉県郡部から立憲政友会公認で立候補しトップ当選を果たした。政界財界の期待を担って大活躍したが、反面表裏の多い政治家生活は他人の意見など耳に入らない彼の性格から、1914(大正3)年12月に第2次大隈内閣によって解散が行われるまでの1期でやめ、再び政界に戻ることはなかった。

8 電力王の座—日本で初のダム式大井発電所の建設

福沢桃介を電力王の座につかせたのは、1924(大正13)年、日本で初めてダム式(抵抗:53m)の大井発電所(出力:42,900kW)の建設であった。

1911(明治44)年から1926(大正15)にかけて桃介が開発した木曾川水系の8水力発電所(八百津発電所、賤母発電所、大桑発電所、須原発電所、桃山発電所、読書発電所、大井発電所、落合発電所)は、資料1の通りである。

資料1：福沢桃介が開発に携わった木曾川水系の8水力発電所

| 発電所名 | 会社名 | 竣工年 | 出力 |
|--------|--------|-------------|---------------|
| 八百津発電所 | 名古屋電灯 | 1911(明治44)年 | 1974(昭和49年)廃止 |
| 賤母発電所 | 木曾電気興業 | 1919(大正8)年 | 16,400 kW |
| 大桑発電所 | 大同電力 | 1921(大正10)年 | 12,100 kW |
| 須原発電所 | 大同電力 | 1922(大正11)年 | 10,000 kW |
| 桃山発電所 | 大同電力 | 1923(大正12)年 | 24,600 kW |
| 読書発電所 | 大同電力 | 1923(大正12)年 | 112,100 kW |
| 大井発電所 | 大同電力 | 1924(大正13)年 | 48,000 kW |
| 落合発電所 | 大同電力 | 1926(大正15)年 | 14,700 kW |

また、桃介が投資し、名前が出てくる電力会社を取り上げてみると、資料2：福沢桃介が携わった全国の電力会社の通り、まさしく

日本の電力王と言われるように全国に20社ほど上げることができる。

資料2：福沢桃介が携わった電力会社

| | | | | |
|------|------|---------|---------------|-----------------------|
| 1898 | 明治31 | 利根川水力電気 | 現在の東京電力・佐久発電所 | 発起人 |
| 1906 | 明治39 | 広滝水力電気 | 広滝水力発電所 | 株主名簿(6,000株のうち1,500株) |
| 1908 | 明治41 | 福博電気軌道 | 東邦電力 | 発起人 |
| | | 豊橋電気 | 長篠水力発電所 | 取締役社長 |
| 1909 | 明治42 | 名古屋電灯 | 東邦電力の前身 | 株主名簿に初登場 |
| 1910 | 明治43 | 九州電気 | 東邦電力 | 取締役 |
| 1911 | 明治44 | 四国水力電気 | 旧三縄発電所、落合発電所 | 取締役社長 |
| | | 浜田電気 | 一之瀬水力発電所 | 取締役社長 |
| | | 野田電気 | 日本電力の前身 | 取締役社長 |
| 1912 | 大正1 | 佐世保電灯 | 九州電力に吸収 | 取締役社長 |
| 1919 | 大正8 | 矢作水力 | 下村水力発電所など | 相談役 |
| | | 白山水力 | 吉野谷水力発電所 | 相談役 |
| | | 日本水力 | 真名川水力発電所 | 相談役 |
| 1920 | 大正9 | 大同電力 | 大井発電所など | 取締役社長 |
| 1921 | 大正10 | 濃尾電気 | 飛騨電気興業、白山水力 | 相談役 |
| | | 尾三電力 | 時瀬、旭発電所 | 相談役 |
| 1922 | 大正11 | 神岡水電 | 跡津、中山発電所など | 相談役 |
| 1924 | 大正13 | 大白川電力 | 平瀬発電所、濃飛電気 | 相談役 |
| 1926 | 大正15 | 天竜川電力 | 南向発電所など | 取締役社長 |
| 1926 | 昭和1 | 昭和電力 | 祖山発電所 | 相談役 |

さらに、木曾川水系の発電所を建設するとともに、その電力を活用するために、

大同特殊鋼(株)、東海カーボン(株)、東亜合成(株)、1998(平成10)年に倒産した矢作製鉄(株)など電力多消費型の電気製鋼、化学工業などを興し、現在の中部圏の基礎を築いた。

なお、この項目で取り上げた会社の概要については次回以降順次詳細に取り上げていくことにする。

9 福沢桃介と川上貞奴一名古屋文化のみち二葉館

川上貞奴は1871(明治4)年に東京日本橋の両替商・越後屋の12番目の子どもとして誕生。本名・小山貞で生家の没落により7才の時に芸妓置屋「浜田屋」の養女となる。美貌で諸芸に優れ、芸妓「貞奴」として、時の総理大臣伊藤博文や西園寺公望など明治の元勳のひいきを受けた。

1894(明治27)年、22歳の時に自由民権運動活動家で知られ、オッペケベー節で風靡した新劇俳優川上音治郎と結婚した。

1899(明治32)年、川上一座渡米の際、サンフランシスコで初めて舞台に立ち、道成寺を踊る。女優貞奴となり、米、英、仏、ロシアなどで名声を博し、1900(明治33)年に開催されたパリ万国博覧会に招かれ、ロイ・フラード・アカデミーで公演、仏政府より「オフィシェ・ド・アカデミー」勲章を受章した。1911(明治44)年に川上音次郎が亡くなり、1917(大正6)年に女優を引退した。

日本の電力王福沢桃介の木曾川開発を陰でサポートしたのが日本の女優第1号の川上貞奴であった。

川上貞奴は1918(大正7)年に名古屋市北区に「川上絹布株式会社」を設立し事業を始めた。そして1920(大正9)年に名古屋市東区東双葉町に川上貞奴邸(敷地：約2,000坪、建坪：179坪)を建て、自ら「二葉居」と称した。桃介はここを仕事上の拠点とし、政財界など各方面の著名人が集うサロンとなり「二葉御殿」と呼ばれた。

福沢桃介は1937(昭和12)年に腎臓の摘出手術を受け、体力の衰えを感じて実業界から

の引退を表明、隠遁生活に入り、1938（昭和13）年、71歳で亡くなった。

一方川上貞奴は生涯の締めくくりとして木曾川を眺める岐阜県各務原市鷺沼に貞照寺を建立し、門前に別荘「萬松園」を建築した。

また、二葉御殿は戦後に大同製鋼㈱に所有

権が移転されたが、2000（平成12）年に名古屋市の寄付譲渡され、2005（平成17）年に東区榎木町に「文化のみち二葉館」として復元、移築され現在に至っている。

なお川上貞奴と福沢桃介の簡単な年譜は次の通りである。

| 川上貞奴 | 和暦 | 西暦 | 福沢桃介 |
|-------------------------------|-------|------|---------------------------------------|
| | 明治元年 | 1868 | 埼玉県比企郡吉見町で生まれる |
| 東京・日本橋で生まれる、本名：小山貞 | 明治4年 | 1871 | |
| 芸妓置屋「浜田屋」の浜田亀吉の養女となる | 明治11年 | 1878 | |
| | 明治16年 | 1883 | 川越中学3年生から慶応義塾に入学 |
| | 明治19年 | 1886 | 福沢家と養子縁組 |
| | 明治20年 | 1887 | アメリカに留学（2年8ヶ月滞在） |
| | 明治22年 | 1889 | 北海道炭鉱鉄道に入社 |
| 新劇俳優の川上音二郎と結婚 | 明治27年 | 1894 | 結核で養生園に入院、療養生活 |
| | 明治28年 | 1895 | 株取引千円の元手で10万円儲ける |
| | 明治31年 | 1898 | 王子製紙取締役に就任、利根川水力発起人総代 |
| アメリカ巡業で、わが国最初的女優「貞奴」となり国内外で活躍 | 明治32年 | 1899 | 京橋に丸三商店設立（約1年後閉店） |
| パリ万国博覧会に招かれロイ・フラー劇場で公演 | 明治33年 | 1900 | |
| | 明治34年 | 1901 | 福沢諭吉先生亡くなる |
| | | | 北海道炭鉱鉄道に再入社（約5年余勤務） |
| 東京、芝に帝国女優養成所設立 | 明治41年 | 1908 | 博福電気軌道設立発起人、豊橋電気㈱取締役に就任 |
| | 明治43年 | 1910 | 名古屋電灯㈱取締役に就任（約半年後辞任） |
| 川上音二郎死去 | 明治44年 | 1911 | 四国水力電気、野田電気、浜田電気の取締役に就任 |
| | 明治45年 | 1912 | 千葉県選出の代議士に当選（政友会公認・1期3年） |
| | 大正2年 | 1913 | 再度名古屋電灯㈱常務、翌年取締役に就任 |
| | 大正3年 | 1914 | 愛知電気鉄道株式会社取締役に就任 |
| 女優引退を宣言 | 大正5年 | 1917 | 電気製鋼所設立、翌年取締役に就任 |
| 名古屋市北区大曾根に川上絹布㈱を設立 | 大正7年 | 1918 | 東海電極製造㈱設立、相談役に就任 |
| | | | 木曾電気製鉄㈱設立、取締役に就任 |
| 名古屋市東区に二葉荘を建設 | 大正8年 | 1919 | 矢作水力㈱設立、相談役に就任（社長：長男の福沢駒吉） |
| | | | 東海電気鉄道㈱取締役に就任（大正11年、愛知電気鉄道に合併） |
| | | | 大阪送電㈱設立、取締役に就任 |
| | 大正9年 | 1920 | 大同電力㈱社長に就任（木曾電気興業、日本電力、大阪送電を合併） |
| | 大正10年 | 1921 | 関西電気㈱社長に10月就任、12月に辞任（名古屋電灯、関西水力電気が合併） |
| | | | 大同製鋼㈱を設立、取締役に就任 |
| | 大正11年 | 1922 | 東邦電力㈱相談役に就任（関西電気と九州電灯鉄道が合併・本社を東京に移転） |
| | | | 東邦瓦斯を設立（名古屋瓦斯を合併） |
| | | | 北恵那鉄道㈱取締役に就任 |
| 川上児童劇団を結成 | 大正13年 | 1924 | |
| | 大正15年 | 1926 | 天竜川電力㈱取締役に就任 |
| | | | 帝国劇場㈱取締役会長就任 |
| | | | 東京に別荘「桃水荘」を建設、東京に移転 |
| | 昭和3年 | 1928 | 実業界から引退 |
| | 昭和6年 | 1931 | 貞照寺地鎮祭に臨席 |
| 岐阜県各務原市鷺沼に貞照寺建立、東京に転居 | 昭和8年 | 1933 | |
| | 昭和12年 | 1937 | |
| | 昭和13年 | 1938 | 東京の渋谷本邸で死去 |
| 熱海の別荘で死去 | 昭和21年 | 1946 | |
| 「二葉御殿」を移築、「文化のみち二葉館」開館 | 平成17年 | 2005 | |

（寺澤 安正）